の規範に沿っているものであるか、また、よりよいムスリマとしての行動を講師の回答に求めているということがわかった。「お茶で語ろう」の勉強会では、先輩のムスリマに若いムスリマが相談する様子を伺えたことから、参加者それぞれが精神的解決を得ていると考えられた。

結論として、経験を持つムスリマのアドバイスが他のムスリマに安心感を与える様子は、エジプトにおけるファトワーに類似するものであるといえた。日本人ムスリマが日本でイスラームを信仰するためには、教義の一部を変化させながらイスラームの根幹は守っていくことが求められる。「ファトワー」こそ、日本におけるイスラームの翻訳であるといえるだろう。ムスリマたちは勉強会に参加することによって、イスラームを翻訳し自らの行動を選択しているのである。

沖縄を通して見る『アメラジアン』

森　　亜紀奈

アメラジアンとは、AmericanとAsianを足して作られた造語であり、アメリカ人とアジア人という複数のルーツを持つ混血のことを指す。本論文では、アメラジアンが米国によるアジアでの戦争と軍事支配という状況下に多く出現したことに着目し、地域を日本で米軍基地が集中している沖縄に焦点をあてた。

米軍基地が沖縄に置かれ、そこで現地の女性と米軍人の社会的接触が起こった結果、生まれたアメラジアンたちは身体に「基地」を背負ってしまった自分自身の経験から、教育権問題など基地という背景を通さない国際結婚とは異なる問題を経験する。

1998年には沖縄に日米二つの言語・文化に誇りを持ちダブル・アイデンティティを育むことを目指して、アメラジアン・スクール・イン・オキナワ（AASO）が開校した。学籍回復の運動や「基地の落とし子」という視線を跳ね返し2つのルーツを大切にしていこう、とする「ダブルの教育」を実践してきた。

本論文では現在までのアメラジアン研究の中で触れられることがほとんどなかった、AASOに通ったアメラジアン達、そしてAASOにボランティアとして関るアメラジアン二世のライフヒストリー聞き取りを通して自己認識や経験を伺うことを基に、沖縄におけるアメラジアンの今後の可能性や展望を考えていく。アメラジアンの若者たちは、自分自身のルーツを受け入れる過程に違いはあったものの、皆自分を「アメラジアン」として肯定的に捕らえ、また自身のルーツの多様さを生かして進路や職業を選択しようとしていた。

またアメラジアンは身体が国家に規定されない存在でもある。韓国にもAASOのような学校がある。人種や国家という枠組みを越えて連帯していくことで、アメラジアンが様々なルーツを持つ人々との外に開かれた連帯のさきがけとなれる存在であることが見直された。同時に、今後軍事化による人種の混合がエスニシティに与える影響に関して新たに考えられていく必要がある。